

成果の説明書

(氏名) 小牧 幸代	(学部) 地域政策学部
<p>1 重要事項</p> <p>① 調査研究</p> <p>2021年度は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金・基盤研究（C））「パキスタン系ムスリム移民社会における「強制結婚」：ノルウェーの事例研究」（研究代表者：小牧幸代）の研究期間の2年目であり、これまでの調査で収集したデータの整理と分析をおこなうとともに、インターネットや文献資料を通じて最新の関連情報を収集した。海外での現地調査は、昨年度と同様、新型コロナウイルスの世界規模での感染拡大のために実施できなかった。そのため、国内のパキスタン系移民社会にも視野を広げ、新大久保と横浜での調査に着手した。また、国内外の研究者による学術論文だけでなく、各国の政府機関やNGO団体が発行している白書や報告書も参照し、世界規模でのパキスタン系ムスリム移民社会の現状把握に努めた。</p> <p>次に、研究分担者となっている科学研究費助成事業（科学研究費補助金・基盤研究（A））「イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究」（研究代表者：上智大学総合グローバル学部教授・赤堀雅幸）は、2021年度が研究期間の3年目であった。コロナ禍のため、昨年度と同様、国内での研究合宿、海外での共同調査・現地調査ができないなど、多くの制限・制約があった。そのため、同科研が主催するZoom研究会に参加して最新の研究動向や現地事情に関する情報と知識を共有するなど、代替手段を駆使して研究が遅滞しないよう努力した。また、海外での現地調査の代わりに、長崎県において「日本におけるキリスト教の聖者・聖遺物崇敬に関する現地調査・資料収集」を実施し、比較研究の基盤づくりをおこなった。具体的には、平戸市、長崎市・外海地区、長崎市内、南島原市のキリスト教関連施設および資料館・博物館等を訪問し、関係者から話を聞いたり入手可能な資料を購入したりするなどした。そして、外国人の宣教師・神父や日本人の「潜伏キリシタン」「かくれキリシタン」、殉教者たちが、いかに聖者として承認され、その遺体が聖遺物として崇敬され、その墓所や殉教地が聖地として信仰されるようになったのか、そのメカニズムをイスラームの聖者・聖遺物信仰との比較の視点で考察した。</p> <p>2015年度に始まった日本文化人類学会課題研究懇談会「嗜好品の文化人類学」（代表：大坪玲子）の研究会は、2021年度が研究成果のとりまとめの年となった。具体的には『嗜好品から見える社会』というタイトルで春風社から刊行された論文集に、「『伝統』からビジネスへ：インドにおけるパーン文化の変容とジェンダー」という論文と「インドの炭酸飲料水」というコラムを寄稿した。</p> <p>2020年7月末にスタートした金曜夜のZoomを使った「パブリックヒストリー・ワークショップ」は、2021年度も隔週で開催された。ほぼ全ての回に出席し、他大学・研究機関の研究者や大学院生と一緒に「パブリックヒストリー」「デジタルヒストリー」「オーラルヒストリー」「感情史」「記憶論」等に関する外国語の基礎文献を講読・読解・議論するとともに、海外から論文の著者にも参加してもらい、講演&質疑応答をすることで多くの知識を習得できた。このようにリモートでの学際的で国際的な教育研究連携は、コロナ禍を逆手にとった非常に有意義な試みであった。とくに、インドのパブリックヒストリー研究の第一人者を招いて、欧米とインドのパブリックヒストリー研究の歴史や立場の違いについて議論する回では、事前に開催した勉強会も含め、非常に大きな収穫があった。</p> <p>2013年度から継続的に調査研究をしてきたインドのテーマパークにおける「宗教・民族・国家・歴史・文化の表象」に関する調査研究については、その成果の一部を「群馬県の遊園地」研究にも応用し、新たに原稿を執筆しているところである。また、第</p>	

38 回高崎経済大学公開講座「現代社会への多面的アプローチ」では、第 1 回を担当し、「記憶の中のカップピア：家族の出来事はいかに歴史表象となりうるか」というタイトルで、遊園地・テーマパーク研究を、パブリックヒストリー研究と接続する試みについて講義した。

② 学術論文

◆「『伝統』からビジネスへ：インドにおけるパーン文化の変容とジェンダー」大坪玲子・谷憲一編『嗜好品から見える社会』春風社、281-305 頁（2022 年 3 月）。

◆「コラム：インドの炭酸飲料水」大坪玲子・谷憲一編『嗜好品から見える社会』春風社、306-307 頁（2022 年 3 月）。

◆「書評・田中雅一他編『インド・剥き出しの世界』春風社」図書新聞 3523 号、4 頁（2021 年 12 月）。

③ 学術講演

◆「記憶の中のカップピア：家族の出来事はいかに歴史表象となりうるか」第 38 回・高崎経済大学公開講座「現代社会への多面的アプローチ」第 1 回講義、2021 年 10 月 19 日、高崎経済大学 1 号館。

2 その他の事項

宮崎県・鹿児島県において、宗教民俗学的調査・資料収集をおこなった。具体的には、古事記に登場する神々や英雄、聖地や聖具が、各地でどのように伝承され展示されて信仰を集めているのか、また聖性の不動性を可動なものとするための護符・御符にはどのようなものがあるか、願掛けや厄祓いの内容は主祭神とどの程度まで関わりがあるのかなどに注意しながら、聖地および資料館・博物館を訪問し調査した。

3 次年度以降の計画・抱負

2022 年度は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金・基盤研究（C））「パキスタン系ムスリム移民社会における『強制結婚』：ノルウェーの事例研究」の研究期間の 3 年目、科学研究費助成事業（科学研究費補助金・基盤研究（A））「イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究」は研究期間の 4 年目である。いずれも調査研究の主要な部分を海外での現地調査・資料収集が占めているため、過去 2 年間は様々な制限・制約があり困難を極めたが、今年度はコロナ禍も終息の兆しを見せており、調査計画の実現可能性は高まっている。引き続き文献資料とネットでの情報収集もおこないつつ、現地との連絡もこれまで以上に密にして調査活動を再開し、現地調査に関する部分の遅れを取り戻したい。

嗜好品研究に関しては、成果物の書評会が開催される予定であり、そこで得られた知見をもとに、これまでの調査研究を振り返り、新たなスタートを切りたい。遊園地・テーマパーク研究を、パブリックヒストリー研究に接続する試みに関しては、東洋大学で 5 月下旬に開催予定の第 72 回「日本西洋史学会大会」の小シンポジウム「パブリックヒストリー：西洋史研究者への問いかけ」（代表：東洋大学名誉教授・岡本充弘）にて、「インドの過去の取り戻し方：YouTube、博物館、テーマパーク」という研究発表をすることで、ひとつの方向性を示す計画である。

教育面では、ドイツのルートヴィヒスハーフェン経済大学から 1 年間の滞在予定で来日した 2 名の交換留学生のための特別講義を担当する。日本の文化や慣行を文化人類学的・民俗学的な議論を交えて紹介するとともに、ゼミ生をはじめとする学生との交流や地域社会との接点を創るなど、双方にとって実りの多い授業をおこないたい。